

社会と向き合う美術とは「水俣・東京展」

北川フラム

十月十六日夜、川崎の産業廃棄物焼却場でいっぷう変わった儀式が行われた。不知火海の漁船、打瀬船「日月丸」の葬儀である。「日月丸」は長い使役のあと、沈没しそうになりながら水俣から東京までやってきた。人と海が一体であった水俣病以前の海の暮らしを伝える、この美しい帆をもった船の最期を看取ったのだ。水俣からやってきた人を含め五十人ほどが参加し、石牟礼道子さんの美しい言葉を私たちは車座になって聞いた。

九月二十八日から十月十三日まで、東京・品川駅旧国鉄跡地で「水俣・東京展」が開かれた。テントが張られた展示会場には物産や飲食のコーナーもあって、それは遠くからは一見イベント空間に感じられるのだが、その入り口にあったのが打瀬船「日月丸」であった。水俣病発見から四十年、「水俣の事実は現代の日本に何を語るのか」と問うべく、四年の準備を経て開かれたこの展覧会は、まさにエキスポの「さらけ出す」という意味どおりにその事実を伝えてくれるものだった。水俣病のクロニクルを自然から始め、水俣病の原因、患者とその闘い、チツソ、県、国の対応、現在の水俣で終える。

また、展示会場には病気の原因になった有機水銀、患者の脳標本、水俣のヘドロ、患者の遺品、また海の道具が並ぶ。さらに、この土地の患者とその闘いのなかで生まれた文学（本）、写真、美術や、土本典昭が遺族を訪ねて収集した五百人の遺影などが展示され、ビデオや映画の上映、音楽、語りなどの催しも行われた。それらは、人に伝え

ようとする行為そのものの根源的な力を感じさせた。

私はこれだけ迫力のある展示を見たことがなかった。それは事実のもつ力と、事実を伝えようとした四十年の時間と、その結節点を東京で伝えようとする多くの人間の労苦によるものだろう。私はこの展示を芸術の根底として掴む。それは人間の魂と文明・社会システムとのデスマッチの軌跡であって、美術初発の動機と同質のものである。

石牟礼道子の『苦海浄土』に始まる文学や、水俣病に関する大部の記録は、同時代の記録を担うべき美術を突き動かす。またユージン・スミスや桑原史成、芥川仁の写真は、写真でしか捉えることのできない人間そのものの厳存を伝え、現象の奥にある真実を伝えようとする美術の動きを鼓舞する。また元チツソ労働者だった鬼塚巖は、生活者の写真の記録として絵を描く行為に指針を与える。

美術は、はたして社会と向き合えているのだろうか。文字や写真が辛苦の末に刻み込んだ、紙背に徹したモノクロームの奥の漆黒の鮮やかさを表したことがあったのだろうか、と自信を失ってしまうのだ。美術がもつ明るさを、私は好む。その親和力や躍動感を私は好む。そしてその未来への予感私たちが鼓舞してくれる。しかし、そのためには社会としっかりと向き合い、文明の病根・社会システムの独りよがりを見つめ続けなくてはならないと、この展覧会をめぐりながら思い続けた。そこを訪れた人たちの真摯さにも心を打たれた。

打瀬船は灰になったあと、水俣の海が見える丘に埋められることになるという。その丘はヘドロの海の埋め立て地にあるが、その墓標が人間に親しまれ、花で埋められるものであるために、美術がかかわれないだろうかとは私は考える。美術は厳しさのなかに咲く花の働きもするものだから。

(アートディレクター)